



2027
常滑 | 愛知

とこなめ陶の森 陶芸研究所

第45期 研修生募集



とこなめ陶の森 陶芸研究所（陶研）と研修制度

陶芸研究所は、「古常滑」に代表される中世以来の伝統と芸術性が、現代陶芸にも活かしていることを広く社会に発信する目的で昭和36年（1961）に開所しました。その後、昭和58年（1983）から研修生への技術指導を開始し、これまでに186名の研修生が巣立ちました。

建学の精神

常滑の陶業陶芸振興へ多大な功績を残し、陶研の設立に尽力された故伊奈長三郎氏は、“陶業の振興は、陶芸が土台になる。陶芸における美と技の目的は、陶業につながる。”（『巧と業の協奏 INAXと常滑焼のあゆみ』より）と述べており、陶研の建学の精神となっています。

常滑陶業界の偉人、伊奈長三郎

伊奈製陶㈱（後の㈱INAX、現㈱LIXIL）の創業者で、初代常滑市長も務めた常滑市名誉市民です。陶管やタイル、衛生陶器などの建築用陶器の一貫生産体制の確立など、常滑陶業界に多大な功績を残しました。さらに、陶芸研究所の設立資金として、常滑市へ自社株を寄付するなど、常滑の陶芸振興にも貢献されました。



研修制度の目的

やきものづくりを
なりわい
生業とする人材を育てる

基本方針

- 「常滑の“まち”とともにづくり手を育てる」
- 「自主性と探求心を持ったづくり手を育てる」
- 「基礎を身に付け、プロセスを大切にするづくり手を育てる」

陶芸研究所職員からのメッセージ

やきものをゼロからはじめる方でも、密度の濃い2年間の研修を通して、自らの意欲次第でやきものづくり手として巣立つことができる、そんな場所でありたい。私たち陶芸研究所の職員はそう考え、研修生を毎年受け入れています。常滑の地は、約1000年前からやきものをつくり続けている産地であり、先人から脈々と受け継がれた技術や哲学を引き継ぐづくり手が日々、作陶に励んでいます。その技術は、薪窯・大物・急須ロクロなど多様で、それらを研修で学ぶことができます。常滑でやきものを学ぶにあたり大切なことは、先人が伝える技術や哲学を自らの糧として探求し、自らの作陶人生を切り拓いていくことです。私たちは、現役のづくり手として活躍している講師や産地関係者とともに、あなたの意欲に応えていきたいと考えています。



ひ
た
む
き
に
、
や
き
も
の
、
常
滑





タタラ

粘土を板状にした
タタラを扱う技術を学びます



ロクロ応用

ロクロ基礎から
より複雑な形や、
より大きなものに挑戦します

1. 自ら学ぶ姿勢を尊重し、その中での気づきを大切にします。
2. やきものづくりの各プロセスを理解し、基本が身につくまで繰り返し練習します。
3. 素材について理解を深めます。
4. 炎を使った焼成技術をしっかり習得します。



装飾(化粧技法)

化粧土を用いた
装飾技法を学びます



染付(下絵付け)

ダミ筆を使った
絵付けの基礎を学びます



陶研の主な設備

焼成設備

- 薪窯(穴窯) ● ミニ薪窯 ● 電気窯(26.5kw / 12kw×2基 / 7kw)
- ガス窯(1.0㎡ / 0.7㎡ / 0.3㎡ / 0.2㎡)

機械設備

- 施釉ブース ● ポットミル ● ロクロ(15台) ● 土練機(4台)
- フィルタープレス ● ベルダー ● バフ ● 道具づくり工具一式

※ 研修室には冷暖房設備があります。



2年間の研修の流れ

入所前～1年次

※ 研修内容は、変更する場合があります。



土づくり

様々な原土を用いて、土それぞれの個性を知り土づくりから生まれる風合いの違いを基礎から学べます



手びねり

思い描く形に粘土を積み上げる技術を学びながら、自分らしい表現を模索します

入所前

試験

● 自由見学

見学は、いつでも受け付けています

● 相談窓口

TEL・Mailでの相談も可能です

● 住まいの相談

入所

1年次

当施設では、経験がない人も受け入れており、1年次はやきものづくりの基礎を学ぶことを重視し、その経験を通して生業とする意識を高めていきます。

※ 経験者にも、レベルに合わせた学びのある研修を行っています。



デッサン

観察力と客観性を鍛え、自分らしい物の見方や表現を見つけます



ロクロ基礎

電動ロクロを使った粘土の成型技術を学びます

陶研の特長

- 講師は現役の職人・作家です。
- 1学年定員5名という少人数制で、個々に合わせて指導します。
- 多種多様な土や原料を使います。
- ガス窯焼成を中心に、窯焚きは自由に行うことができます。また、薪窯(穴窯)による実習も行います。
- 研修や講義のない日曜・祝日も施設を利用できます。

日程・時間

【研修日】

毎週 火曜日～土曜日 (年間約240日)

【研修時間】

午前8:30～午後5:00 (昼休み1時間)

※ 窯焚きで深夜になることもあります。

※ 研修時間は、変更する場合があります。



修了制作

修了後の活動につなげるために、各研修生が自主性を持って取り組む研究制作です



中古道具の紹介

産地に眠る空き家・工房・中古道具の情報を、使いたい方へ提供します

修了

修了後の支援

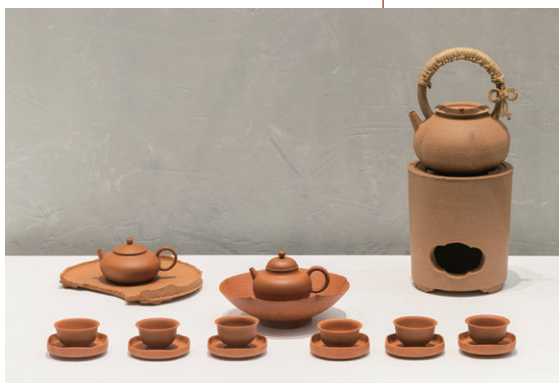
修了生に対し、常滑で活動するための様々な支援を行っています。

- 工房家賃の補助(3年間)
- 空き家・工房・中古道具の紹介
- スキルアップ教室、オープン講座の開催
- 研修工房の窯や設備の使用(有料・要予約)
- 伝統的工芸品・常滑焼窯元への就職支援

入れます。

していきます。

修了後の活動へ結びつけます。



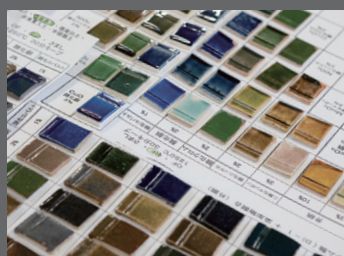
修了展

作品展示を通して、社会に繋がる第一歩となる発表の場です



スキルアップ教室

プロとして活動しているつくり手に向けて、技術向上を目的に開催しています



釉薬講義

望む釉薬が作れるように、原料や作り方を学びます



茶華道

やきものを取り巻く文化を学び、使う目線からの気づきを得ます



フィールドワーク

県内外のやきもの工房や関係施設を視察し交流を深めます



イベント参加

市民向けのワークショップなどを体験します

その他、「陶磁史・陶芸概論」や「講演会」、「デモンストレーション」を行います。

2年間の研修の流れ

2年次～修了後の支援



常滑独自に発展した卓越した急須づくりは注目を集めています

急須ロクロ

急須産地で常滑独自に発展した、精度の高いロクロによる急須づくりを学びます



いこ 鑄込み

泥状の粘土を型に流し込む、鑄込み技法の基礎を学びます



インターンシップ

つくり手の現場や仕事を体験し、自らが活動するための気づきを得ます



情報発信力

作品・作者の紹介方法や、その発信の仕方を学びます

2年次

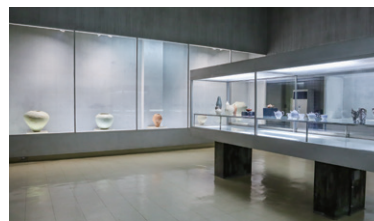
1年次に学んだやきものづくりの基礎を活かし、自主性を持って、進む方向性をより明確にしていきます。

1. 研修生の自主性を尊重し、自由な時間を多く取り
2. これまでの研修を通して、自ら進む方向性を明確に
3. “まち”や“人”とのつながりを研修の中に取り入れ、



絵付け

絵をほどこすための基本的な技術を学びます



1年次 2年次 共通項目



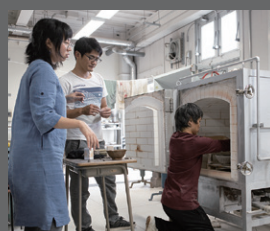
探求と表現

各自がやきもので表現したいことを見つけるための授業です



土器焼

最も原始的な野焼による土器づくりを学びます



ガス窯・電気窯焼成

それぞれの窯の特徴をつかみ作品にあった焼成技術を学びます



薪窯焼成

1200°Cを越える炎を操る薪窯体験を通して、やきものづくりの原点に触れます



窯の焼成は、自主的に計画をたてられます。



陶芸作家

藤田 徳太さん

福岡県出身

陶研 第12期生 (1997年修了)

いろいろな人に助けをもらい 決断と行動を繰り返す。

自分は、高校卒業の18歳から陶芸をはじめて今年で31年目。九州の出身ですが、ふとしたきっかけで常滑で陶芸をすることになったんです。

高校1年のときに九州から遠く離れた愛知県有松に叔母がいることをきっかけとして、親戚中を巡る一人旅を思い立ちました。そのとき、有松の叔母が常滑の「陶研」に連れて行ってくれたんです。たぶん自分の父親が陶芸をやっていたので、興味があるだろうと察したんだと思います。

それから時が経ち高校3年を迎え、周りのみんなが進路を決めていく中で、自分はどうしようかと迷って悶々としていたとき、なにげなく陶芸の道を志そうと思いたちました。いろいろな産地の求人電話帳を探していたところ、「常滑市立陶芸研究所」が目に入り、なんか前に行ったことあるぞって思ってさっそく電話してみました。これが陶研に入所した経緯です。

当時の研修期間は1年で、全部が新鮮でとにかくロクロをまわすのが楽しかったんですが、まだ陶芸を生業にしようとは思っていませんでした。そんな思いで1年はあっというまに過ぎていきましたが、周りの勧めもあり研修の延長申請を出して計3年間を陶研で過ごすことになりました。その後、講師だった荒木俊雄先生に弟子入りし、修行時代は厳しく貧しい生活でしたが、先生から学ぶことも沢山ありました。

それから3年半が経ち、思い切って独立したもののまだまだ苦しい生活が待っていました。なんとか陶芸関係の仕事を探そうと電話帳を片手に手当たり次第電話を掛け、陶芸教室の講師という仕事を獲得。もちろん自分の作陶も疎かにしなくなかったので、まずは工房探しをはじめました。たまたま見つけた物件はボロボロで屋根もなく、大家さんには修繕する余裕はないから貸し出しできないといわれる始末。それでも諦めきれなかったのでコツコツ貯めていた全財産120万円のうち、思い切って90万円を修繕に充てて自分で直すことにしました。さらに、お金をかけたのにすぐ退去というのは困るので自分で契約書をつくり10年契約で、家賃は1万円ねと直談判しました。



く 美術造形作家時代の
感覚が活きる醤油差し

手づくりロクロ急須は >
ギャラリー店主に
勧められてはじめて



これを機に、「10年の間に自分の工房を持つぞ」と誓って、陶芸教室の仕事と自分の作陶に没頭する生活がはじまりました。陶芸教室を2件掛け持ち、1ヶ月のほとんどを休みなく通って生活をつなぐのに必死でした。その間も工房で夜中まで注文品の作陶をしたり個展を開いたりしながら徐々に陶芸で稼げるようになったんじゃないかな。自分の工房を持つと誓ってからちょうど10年、自宅と工房を持つ夢を叶えました。その間に家庭も持ったのでとにかく生活がたいへんでした。

あと、陶研の同期は窯元で環境が整っていたこともあって早く自分の工房が欲しかったっていうのも必死になれた理由だと思っています。負けたくないライバルのような存在が周りにいたことはよかったですね。

陶芸教室の講師時代には、生徒さんにいろいろな仕事や家庭環境の人がいて、トラック運転士さんの話を聞いたり、家庭の愚痴を聞いたりしながら仲良くなり、「試作の器をつくったから使ってみて」という交流も生まれました。当時の生徒さんは今も個展に来てくださったり、一緒にご飯に行ったりしますよ。それから、貸し工房時代にいろいろ助けていただいた近所の人たちにも、当時の感謝を忘れず今もお付き合いは続いています。

時々、「やきものは好きか」と聞かれるけど、続いているっていうことはたぶん好きなんじゃないかって思ってます。九州に長期間帰ったとき、1週間粘土に触らなかつたことがあったんですが、なにかさみしい気がしました。なんかヒマだなぁ、粘土さわってないと落ち着かないなぁと。そういうときに、自分はやきものが好きなんだなぁと気づく。

だけど、工房で作陶している時はそんな思いばかりじゃない。「なんか違うなぁ、ちょっと直そう。」「納期も大事、責任を果たさないといけない。」そんな重圧があって、ただ「楽しい」「好き」だけでは済まないよね。それでも何か発見していくことを楽しんでいく。「ロクロでここをこうやれば何秒早く挽けるな」とか、「薄く挽けば削りの手間をひとつ減らせるな」とか工夫をして乗り越えていくことに楽しみが生まれてくる。

今思うと、貧しくて苦しい中でいろいろな人に助けられながらも、とにかくやきものをつくるのが楽しかったんじゃないかなって思っています。



身体性とリズム感が
奏でるライブ感。

陶芸作家
東 絵理さん
愛知県出身
陶研 第31期生(2014年修了)

幼少期や高校生の時は、絵本作家になりたい夢もあり、絵本を見るのが好きでした。陶芸の方はテレビでしか見たことがなく、ロクロで作られる形が魔法みたいで面白い!!と感じていました。そのくらいでした。その陶芸(土)に初めて触れたのは、高校の陶芸部、土から形を生み出すことが楽しかったと覚えています。その後、大学に入学し、幼いころから好きで続けていた絵(油彩)を専攻しましたが、陶芸に触れる機会にも恵まれ、そのとき感じたことは自分が想定したものと、焼けた完成品が少しずれることに楽しさを感じました。その陶芸をもっとやりたいと思い、常滑の陶芸研究所で学びました。

私は以前から作品づくりにおいて、形にアンバランスさや不安定なところに面白みを感じ惹かれる要素になっています。それはマチス、ピカソ、バスキアの絵画からの影響を受けており、顔が大きい、小さい、丸い、四角いなど…。人間とわかるけど、そのアンバランスさが面白いと感じていて、自分の作品からも同様に感じてほしく制作しています。その表現として、作品のそれぞれのパーツをロクロで作り、そこで出てきた形を活かし、組み合わせる方法をとっています。例えば、形全体を細長くしたり、カップの高台を大きくしたり、取っ手を大きくしたり。また、組み合わせたパーツの軸をあえて少しずらしてみたりと、形のアンバランスさを強調するように工夫します。

他に、装飾のアンバランスさも必要です。装飾は転写シートやブラチナ彩をよく使いレイヤー(層)を重ねていくイメージで、「異質さ」を作っています。転写シートの層に色を重ね、さらに形に対して暴力的・破壊的な要素をプラスしていきたいと意識しています。

そこでは、自身の身体(肉体)性が必要と思っています。絵を描いていた学生の際は、身体全体を使って絵を描いていました。陶芸も同じで、作品を作るうえでも自分の出せる良い身体性を作品に落とし込みたいと思っています。人それぞれが持っている身体性で変わるので、それらを作品に落とし込んでいきます。



その身体性と自分の中から出てくる動きやリズム感を意識して、色をのせる、勢いや鋭さのある筆跡、引っかきとか、ちぎるとか、ライブ感みたいなものを出していきます。

このことに気づかせてくれたのは、元々好きだった絵本の世界、特に絵本作家の新井良二さんの絵が好きです。色の感じや筆の使い方、絵具のチューブから直接絵を描いたりして、それこそライブ感やリズム感、色の感じや筆の使い方が好き。

他に色使いは絵画からも、ピカソ、マチス、バスキアたちの色の組み合わせを学び吸収しました。例えば、緑と紫色が合うなど。全体的に明るい色が多く、黒や暗めの色はアクセントで使います。

私にとって、これらの制作工程は頭で組み立てることはなく、その瞬間瞬間の自分のライブな感覚(セッション的な)を作品につづけていく感じ、その瞬間が作品に残せられたら(表現できたら)良いなと思制作しています。

そして、このことはオブジェ

でも絵画的要素、絵本から飛び

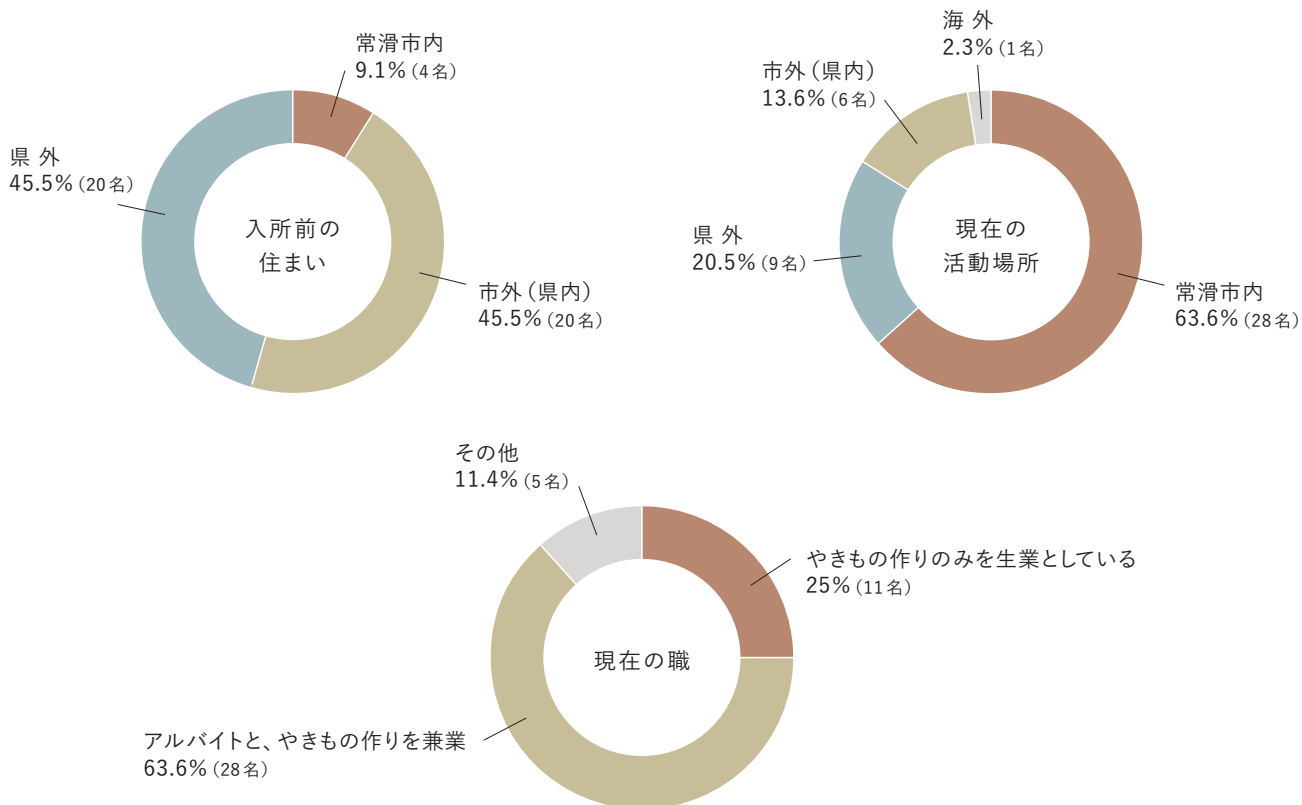
出してきた世界観を落とし込みたいと思って作っていて、花器たちや食器たち(道具)も絵画・絵本から飛び立たせたい感覚でいます。平面とか立体とか関係なく、垣根を越えたい気持ちが強いんです。(なので展示会場では、)展示台も作品も、壁掛け作品も含めた空間を、平面と立体のイメージを行き来するような感覚を、感じてもらいたいと思っています。

花器は造形のおもしろさを求めて表現し、同じ道具でも食器では「使う人が元気がでる」ような、だけど普段使いできる作品を意識し、私の作品を持っている人が、使っていて、日々楽しい気持ちになる作品、「そこにあるだけでも元気になる!」と言ってもらえたらいいなと思います。



研修修了後の活動状況 (令和8年6月時点)

2年間の研修制度を開始した平成24年度(30期生)～令和6年度(42期生)の13年間に修了した、計44名の活動状況



第42期生 修了展作品 (一部)



第45期生 募集要項

研修期間	2年間(令和9年4月～令和11年3月)
募集人数	5名
研修費	月額2万円 ※各自購入する道具等は別途実費負担となります。
応募資格	以下の(1)～(4)の全てに該当する人 (1) 満40歳未満の人(昭和62年4月2日以降に生まれた人) (2) 大学・高等学校卒業及び卒業見込みの人 または高等学校卒業と同程度の知識及び技能があると認められる人 (3) 心身ともに健康で、研修期間を通じ熱意をもって研修に専念できる人 (4) 研修修了後、引き続き陶業陶芸を仕事として継続する意思のある人 ※外国籍の人は、日本語能力試験N2相当の能力を有していること。
応募受付期間	一次募集受付 令和8年10月24日(土)～11月8日(日) 着 二次募集受付 令和9年1月5日(火)～1月19日(火) 着 ※一次で合格者が定員に達した場合は、二次募集を行いません。 二次募集の有無は、ホームページにてお知らせします。
応募書類	1. 履歴書(市販A4サイズ/6か月以内撮影の顔写真添付) 2. 作文 テーマ:『陶芸研究所で取り組みたいこと』(800字程度・任意様式) 3. 日本語能力認定書(外国籍の人)
応募方法	以下の受付場所へ応募書類を持参または郵送(メール不可) 受付場所 〒479-0822 愛知県常滑市奥条7丁目22番地 とこなめ陶の森 陶芸研究所 持参の場合 受付時間 午前9:00～午後5:00 ※休館日は毎週月曜日(祝日の場合は翌日)です。 郵送の場合 『特定記録郵便』の扱いにすること ※宛名面に「研修生応募書類在中」と朱書きしてください。
試験日程	一次募集の試験日 令和8年11月22日(日) 二次募集の試験日 令和9年2月7日(日) ※一次で合格者が定員に達した場合は、二次募集を行いません。
試験内容	●適性検査(60分) ●実技試験(90分) ●面接 試験当日の持ち物 ●受験票(応募受付後、郵送します) ●筆記用具 ●タオル2枚、作業着 ●昼食 ●自身の作品写真(ある人のみ)
合格発表	ホームページにて合格者の受験番号を公開したのち、 受験者全員に郵送で結果を通知 https://www.tokoname-tounomori.jp/ ※入所手続については、結果とともに合格者に通知します。

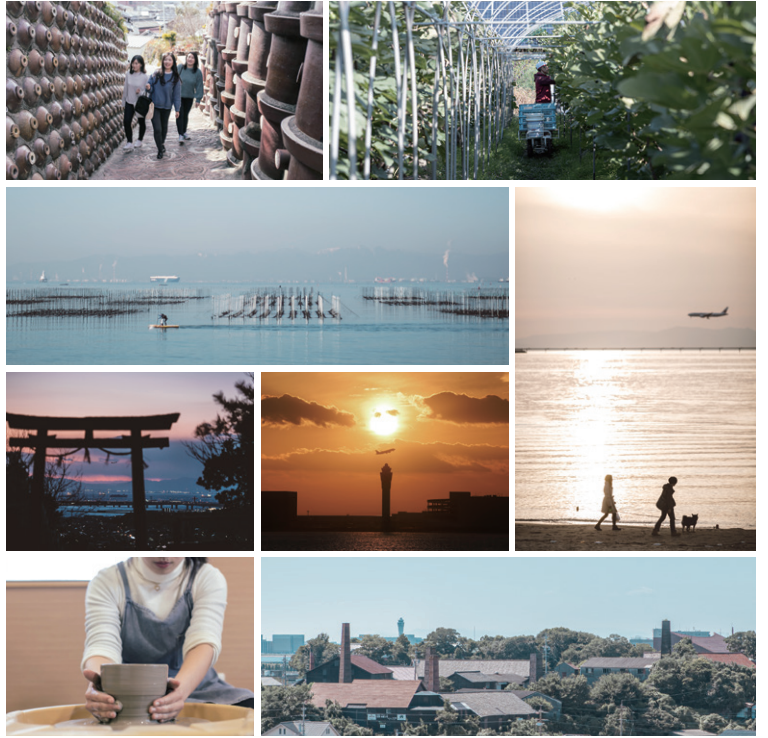
やきもの・海・空のまち、常滑

伊勢湾に面した人口約6万人の常滑市は、年間を通じて温暖で漁業や農業を育み、多様な食に恵まれています。

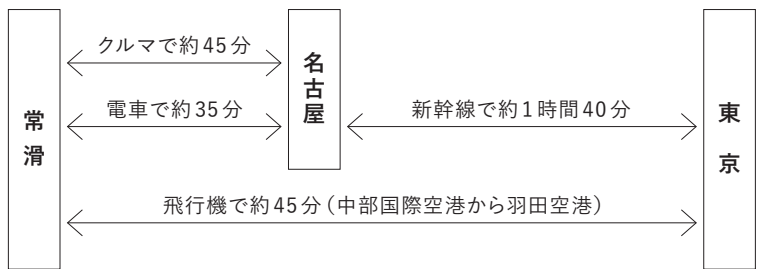
常滑のやきものの起源は中世と古く、窯業で栄えたまちを象徴する窯跡や煙突を現在でもみることができます。

歴史を感じられる風景と、海上には中部国際空港が浮かびまち独自の景観を生みだしています。

また、名古屋への交通網も整備されており都市部へのアクセスも良好です。



交通アクセス



※中部国際空港からは国内の各空港、中国や東南アジアの直行便があります。



陶芸研究所



研修工房

とこなめ陶の森(資料館・陶芸研究所・研修工房の3施設の総称)は、やきもの文化の創造と発信の地として、陶業・陶芸の研究・研修の拠点として、また常滑焼の振興と伝承の地として一体的に常滑市が運営しています。

常滑市 経済部

とこなめ陶の森 陶芸研究所

お問い合わせ

所在地 〒479-0822 愛知県常滑市奥条7丁目22番地

TEL/FAX 0569-35-3970 E-mail tounomori@city.tokoname.lg.jp

開館時間 午前9時～午後5時 休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始

アクセス ●名鉄常滑駅からタクシーで約5分、徒歩約30分

●名鉄常滑駅から知多半田駅行きバス「INAXライブミュージアム前」下車、徒歩約10分

研修を希望する方のみ、施設・研修見学はいつでも受け付けています

お知らせ・最新情報

とこなめ陶の森
ホームページ

とこなめ陶の森



研修の様子を
リアルタイムに
アップ

Instagram



動画で見る
とこなめ陶の森
陶芸研究所

YouTube



日本遺産のまち
常滑市

〈事業主体〉 常滑市 <https://www.city.tokoname.aichi.jp/>